





此又其要なるコト能ハサル所ノ表ハ用益権  
ノ目的タル所ノ者ナリ  
用益権ハ当初ヨリ一定ノ期限ヲ定メタルト然  
ラサルトノ区別ナク凡テ有期ノ権利ニシテ用  
益者ノ終身ヲ限リ継続スルニ権利ナリ然レト  
モ用益者ノ終身ハ用益権ノ最長期ヲ示ス者ニ  
シテ是死亡ノ後他人ニ移轉スルニトテ得ス若  
シ之ニ及ビ用益者ノ死後他人之ヲ相続スルコ  
トヲ得ル者トスル時ハ之ガ為メ所有権ハ其目  
的タルモノ、所得ヲ奪ヒ去ラレ、ヲ以テ永ク

河原ノ利益ヲ有セサル者ニ在リテ其ノ權利タル



何事ノ利益ヲ有セサル者名無事ノ權利ナル  
ニ至ルベシ

是レニ由テ之ヲ看シバ用益權ニ所有權ノ一部  
分ニシテ是ヨリ枝分シタル一個ノ權利ナルコ

ト明カナリ

右ニ由ブシテ其ノ所有權カ其主タル部分ナル收  
益ノ權利ヲ失ヒタルトキハ之ヲ名ケテ虛有權  
ト謂フ若シ單ニ使用ノ權利ヲ分離セラレタル  
トキハ虧缺セル所有權ト謂ヒ又少シキ枝分ス  
ル所ナキ場合ニ於テハ完全所有權ト稱ス



本編第二帙：於テ完全又ハ虧缺ノ所在権ヲ以  
テ物権中ノ第一位ニ掲ケタルハ蓋シ此等ノモ  
ノヲ設ヘルナリ

茲ヲ以テ用益権ヲ設定スルコトハ友ノ如キ票

甲ニ爲スルモノナリ今自己ノ財産ヨリ生ズル

收益ヲ以テ生活ヲ爲スニ充テラサレモ其助産ヲ

讓渡シ其報酬トシテ一個ノ用益権ヲ取得スル

トキハ其用益権ハ用益者ノ年齢多キニ從テ益

大ナルモノナルコトヲ得心シ何トナシハ用益

権ハ其性質上用益者ノ終身ニ止マレ権利ナリ

ヲ以テ用益権設定ノ當時用益者タルモノ改ニ



權ハ其性質上利益者ノ終身ニ止マレ權利ナリ

ヲ以テ用益權設定ノ當時用益者タルモノ既ニ  
年數多キトキハ用益權存在ノ間短キヲ以テ用  
益權ヲ設定スルモノ必ス多クノ收益アリモノ  
ヲ目的物ト為スベクレハナリ  
遺言ヲ以テ用益權ヲ設定スルモノ亦相続ニ屬ス  
ル元本ノ一部ヲ正当相続人ヨリ奪フコトナ  
クニテ遺言者ノ配偶者親族又ハ老年ノ使用人  
等ヲ以テ生流ノ方法ヲ得セシムル為メ遺言者  
ニ取リテ優利ナル方法ナリトス  
又戸主タルモノ馬生前中ニ於テ其相続人ニ家



督ヲ讓リタル場合ニ於テハ相続人が他人ノ財  
産ヲ讓渡スコトアルモ仍ホ自己ノ生計ニ不便  
ヲ奉スコト莫カラシムル爲メ自カク用益権ヲ  
包有スル場合アルベシ

第一款 用益権ノ設定

第四十條

純然タ人用益権ガ或ル種類ノ人ノ爲ニ法律ノ  
規定ニ因テ当然設定セラルル場合ニ本法中ニ  
於テ未ダ之ヲ表ス婚姻中婦ノ財産ニ於テ夫  
有スル権利ハ用益権ナシカ如シト爲テ其実情

是ト相以テ人ノ三ノ爲者財產取得條第四百廿七



有スハ權利ハ用益権ナリカガ如シト云々其実情

是ト相似スルノ三考若クハ所得權第四百廿七

条ニ於テハ特別法ノ設置ニ因テ法律ノ規定ニ

因リ用益権ノ適用ヲ看ルコトナレバ人ノ意

思フニ因テ用益権ヲ没スル場合ハ所有権ノ讓

渡ス場合ト同一ニテ要スルニ合意又ハ遺言

ニ依ルモノナリ然レドモ用益権ノ設置ニ特別

ナル一箇ノ場合アリ而シテ他人ニ物ヲ讓渡スル

当リ其讓渡人が自己ノ利益ノ為メ其物ノ用益

権ヲ留存スル場合是ナリ

時節モ亦用益権ノ定ニテ其適用ヲ受クルハ例



合バ一人ニテ或ハ物ノ用益権ヲ置キテ又ハ  
其賣主ハ真正ノ所有者ニ此ナリシト假定セシ  
此場合ハ放テ賣主用益権ノ占有ヲ為シ即チ時  
節ノ為ニ必要ト定マリ又ハ時間平穩ニ用益権  
ノ行使ヲ為シ又ハトキハ用益権ハ此時ヨリ其  
終身間全ク其有ニ歸ス人モノヤリ然レドモ時  
節ハ物権ヲ取得スル直接ノ方法ニ此ナリ又ハ以  
テ此ノ此キ場合ニ放テ時効成熟シ又ハトキハ  
用益権ハ人ノ意思ニ因テ設定セラレ又ハ若ト  
ノ推定ヲ受クト認マコトヲ要ス即チ真正ナル

所有者ハ一ノ爲考ニ因テ此用益権ノ讓渡ヲ承



人推定ヲ受クト謂フコトヲ要ス即チ莫正ナリ

所存者ハ一ノ要考ニ因テ此用益權ノ讓渡ヲ承

諾シタルモノト推定セラレ而シテ用益者ハ此

要考ノ意授ヲ提出スルノ責ヲ免除セラレタル

事ナリ

第四六条

法文ニ於テ用益權ノ目的物トナルコトヲ得ハ

キ権之ノ財彙ヲ指示スルコトニ務メタリト爲

テ致テ用益物ノ種類如何ヲ問ハズ用益權ノ効

力ニ悉ク同一ナリト謂フニ執ラズ之ニ及ビ用

益權ノ効力ハ其目的トスル者ノ性質ニ從ヒ著



之ノ相異十八ニト有ルキハ次ノ二款ニ規定

スル所ニ因テ之ヲ知ル心ニシテ

本条ハ独リ人ノ意思ニ因テ設定セラレ又ハ用

益権ニ適用スル中而已ナラズ仍ホ法律ノ規定

ニ因テ設定セラレ又ハ用益権ニ適用スルキ

者ナリト云々其方ニ属スルモノヤリ

并四於七条

本条ハ用益権ヲ設定スルニ付キ之ニ附スルコ

トヲ得ハ交態ヲ示セシ者ナリ即チ其成立又ハ

其継続期ヲ変更スル所ノ事情ヲ規定スル者ナ

リ此等ノ事情トハ未必條件期限又ハ条件及ビ



其継続期ヲ変更スル所ノ事情ヲ規定スル者ナ

リ此等ノ事情トハ未必條件期限又ハ条件及ビ

期限ノ存セザルコト等是ナリ最後ノ場合ニ就

テハ其用益権ヲ單純ノ者ト認メ又其用益権

奉条ニ先ツ用益権ニ有期ニテ設定スルコトヲ

得ル旨ヲ明記セリ而シテ均シク有期ト稱スル

者ノ中心権利ノ始時ヲ定メ又ハ有期ト稱スル

ヲ定メ又ハ有期ト稱スル者ト稱スル者ト稱スル

ニ期限ヲ附スルコトヲ得ト明記シ又ハ有期ト

ニ期限ニ定ムル者ト稱スル者ト稱スル者ト稱スル

ヲ以テ所有権ニ在テハ之ヲ附スルコト能ハザ



レバナリ然レ用益権ニ所有権ト異ナリテ本  
未要分ノ権利ヲ包有セザルヲ以テ当事者ノ意  
思ニ從ヒ或ハ時ニ始マリ或ハ時ニ終ルヲ  
得ルニ因リ或ハ至当ノ事ナリトス  
未必条件ニ至テハ停止ノ者ト解除ノ者ト又  
ハ之ヲ用益権ニ附シ又ハトキハ其効力ニ所  
有権ノ場合ニ於テ止ルト至クハ一ナル心ニ停止  
ノ條件ノ場合ニ於テハ権利ハ其条件ノ成就ニ  
依リトキ止ルガ如シ生セズ解除ハ其条件ノ場合  
ニ於テハ条件ノ成就ト共ニ権利ハ消滅スルニ

然レドモ西國ノ場合ニ於テハ  
然レドモ西國ノ場合ニ於テハ  
然レドモ西國ノ場合ニ於テハ



：於テハ条件ノ成就ト考メ權利ノ消滅スルコト  
然レドモ兩個ノ場合ニ於テ期限ノ場合ニ於ケ  
ルト異ナル權利ノ発生ニ又ハ消滅スルハ條件  
ノ成就ニ付ルトキヨリ後ニ向テ人ニ其効力ヲ  
有スルハ此レニテ合意又ハ遺言ニ因テ得タル  
權利ノ発生ニ付ル當日ニ溯ルル者ナリ故ニ停  
止條件ノ場合ニ於テ條件成就ニ付ルトキハ當  
初ヨリ其權利常ニ成立ニ付ル者ト看做サレ之  
ニ及ビテ解除条件ノ場合ニ於テ條件成就ニ付  
ルトキハ其權利始メヨリ成立セザル者ト看做  
サレ茲ニ於テ虛有者ト用益者トノ尙果實ノ清



弄ヲ方スノ心要生ス心ニ

事必条件ノ訴求人効力ヨリ生スル他人ノ結果ニ

ニテ停止又ハ解除条件ノ成就前用益者が承諾

ニタル抵当権ニ関シテ生カセモノ有リ蓋シ

用益権ニシテ成立スルトキニ執カシ心用益権

ノ抵当ハ有効ナルコト能ハズ故ニ停止条件ノ

成就ニタルトキハ用益者ノ其ハタル抵当権ハ

有効ナル心ニトモ解除条件成就ニタルトキ

ハ其抵当権ハ有効ナルコト能ハズ

管理ノ権限ヲ以テ方スミトテ得心キ制限内ノ

期間ヲ以テ方ニタル貸貸ニ関シテハ若シ停止



管理ノ権限ヲ以テ為スルトヲ得ルキ制限内ノ

期間ヲ以テ為シタル貸貸ニ関シテハ若シ停止

ノ条件が成就シタルトキハ当功契約ノ期間満

了スルマデ在ク有効ナル心シ若シ解除条件ノ

成就シタルトキハ於テ良ク右ノ制限ヲ超シタル

ルトキハ貸貸を終了スル心シ(第百九条以下) ~~第~~

三項ノ規定ニ従ハル用益権ニ條件若クハ期間

ヲ附シタルトキハ仍ホ用益者ノ死亡ニ因

テ用益権ノ消滅ヲ致スル心シ要スルニ用益権ハ

用益者ノ死亡ニ先<sup>チ</sup>他ノ原因ニ因テ消滅スル

コトヲ得ルトモ用益者ノ死亡後ニ至ルマデ



仍亦健續スルコトヲ得ルハ至シクモ至シクモ

第四於ハ至

本業ハ各人ノ合意ニ基キ多ク自由ヲ與ヘタル者

ナリ然レドモ致シ出生シ又ハ少クモ昭内ニ

在ル人ノ方ニスルニ汎カシク用益權ヲ設定ス

ルコトヲ許サズ此ノ如ク方ナリ時々用益權

ハ人ノ終身ヨリ長クシテ久シク所有權ヲシテ

收益ノ實ヲ失ハシムヘシナリ然レドモ現

ニ存スル人ノ方々ナリ時々二人ノ配偶者二人

若クハ數人ノ兄弟朋友等ノ如キ多クノ人ノ方

ニ用益權ヲ賦與シ又ハ遺贈スルコトヲ得ル



若クハ教人ノ兄弟朋友等ノ如キ多クノ人ノ為  
ニ用益橋ヲ賜與シ又ハ遺贈スルコトヲ得心シ  
一人及ビ世既に生シタル教子ノ為ニ之ヲ決定  
スルコト又均シク為シ得心キ所ナリ此ノ如ク  
塔舎ニ施テハ教人ヲシテ同時ニ且ツ用益物ヲ  
令ツコトナク收益ヲ為サシケルコトヲ得心ク  
或ハ教人が收益ヲ為ス心キ順序ヲ定メ以テ順  
次ニ用益橋ヲ行ハシケルコトヲ得心シ孰シノ  
場合ニ施テモ用益橋ハ人ノ修身ヨリ長ク所有  
橋ノ員担々ルコト能ハカルナリ(参看第百〇三  
卷)



法律ハ平ノ胎内ニ在ルモノヲ以テ已ニ出生シ  
 タルモノト看做セリ是レ民法上善悪ニ認メラ  
 シタル事則ニ之ヲ本籍ノミナラス他人ノ法律ニ  
 於テモ之ヲ看入ルニ特ニ相續ノ事項ニ於ケル  
 如キ是ナリ或ハ已ニ胎内ニ在ルト否トハ知リ  
 得ベカラザル事矣ニ之ヲ其時ヲ定ムルニトモ  
 如困死ナリトハ訛死ヲ為スモノ有ルニトモ  
 モ法律ハ人ノ出生ノ時ヨリ前ニ溯キ或ハ日  
 數ヲ數ヘテ人ノ胎内ニ生シタル時如ク推定ス  
 ルニトモ知ルニ

第二款 用益者ノ權利



第二款用益者ノ權利

第四於九条

本条ハ用益者が其權利ノ目的タルモノ、占有  
 ヲ得ハシム時如ク定メタリトモ、占有權利ノ喪失  
 シタル時ト云フニ止メタリ斯ノ如ク、單ニ權利  
 ノ喪失シタル時ト指定シテ孰シノ時ニ權利喪  
 失スルモノナルヤヲ明カニセザル所以ノモノ  
 ハ蓋シテ原則ニ因テ之ヲ知ルニ足レバ、  
 之ヲ用益權ニシテ何等ノ条件即チ占有ハラサル時  
 ハ合意ノ場合ニ於テハ當事者双方ノ意思ノ投



合ニ依リ合意成立シタル時権利直千ニ発効シ  
是言ヲ以テ用益権ヲ設定シタル場合ニ於テハ  
遺亡者ノ死亡ニ因テ発効スル者ナリ若シ停止  
ノ条件アルトキハ権利ハ条件ノ成就シタル時  
始メテ発効スルモノナリ

此点ニ於テ期限ハ条件ト同一ナラズ何トナシ  
バ条件ハ権利ノ発効ヲ停止スルモノナリト雖  
モ期限ハ率ニ権利ノ行使ヲ停止スルモノニシ  
テ其発効ヲ俾也スルコト無ケレバナリ故ニ期  
限ヲ附シタル用益権ハ其期限前ニハ発効スル

モノナリ然レドモ期限ノ目的ハ至ク用益者ノ



限ヲ附シタル用益権ハ其期限前已ニ開始スル  
モノナリ然レドモ期限ノ目的ハ至ク用益者ノ  
收益ヲ始ム心キ時期ヲ延ハスニ在ルモノナリ  
カ故ニ期限前ニ於テ用益者が用益物ノ占有及  
ビ收益ヲ為スベカラハルハ勿論ナリ茲ヲ以テ  
法律ハ特ニ期限ノ到来シタル時ト認ヘリ  
用益者が用益物ノ占有ヲ得ルハ其權利發効セ  
且ツ期限ノ到来シタルコト不巳ヲ以テ是レリ  
ト為サズ仍ホ法律ガ虛有者ノ利益ヲ保護スル  
由ニ用益者ニ課シタル三個ノ義務ヲ履行シタ  
ルコトヲ必要ト為ス三個ノ義務トハ動産ノ用



録不却産ノ形状書ヲ作り證人又ニ其他ノ擔保  
ヲ欲スルコト是ナリ

此三個ノ義多シ申七十條已下ニ於テ詳細ニ記  
明ス心也

本条ニ用益者が何等ノ債權ヲモ請求スルコト  
ヲ得ズ又何等ノ物好ヲモ望ムノ權利ナキコト

ヲ明記シ以テ用益權ト債權トノ差異ヲ判明  
ナラシメタリ債權權ノコトニ後ニ至テ之ヲ誤

ク心也

右ノ如ク規定ストモ是モ若シ當る者が是ト思フナ

ル旨意ヲ指シタル語ニ此旨意ニ於テハ勿



右ノ如ク規定スト多クモ若シ當ル者ガ是ト異ナ

ル旨意ヲ表シタル時ハ此旨意ニ依リ心キハ勿

論ナリ蓋シ旨意ハ當事者ノ間ニ於テ法律ト同

一ノ効力ヲ有スト云フコトハ屬適用ヲ受クハ

キ普通法ノ原則ナリ(第三百四十八條)

然レドモ虚有者ノ過失ニ因テ修繕ヲ必要ナラ

シメタル時ハ虚有者ハ最早之ヲ為スノ義務ヲ

受レザルコト当然ナリ

此事項ニ関シテハ法律ハ一個ノ區別ヲ為セリ

今之ヲ示ス心シ

若シ用益権ノ喪セザル後用益物現存ニタル時



ハ 詮令似ホ 権利到来ノ以前ニ在リトスルモ 虚  
有者カ物ノ看守<sup>送</sup>意ヲ缺キ又ル時ハ 此一事ヲ  
以テ自カヲ 責任ヲ受ルハ 能ハズシドモ 若シ  
権利発開ノ爲ニ 於テ 用益物現存シ又ル時ハ 虚  
有者ハ 其虧損ノ處爲ガ 虚有者ノ 任意ニ 出テ 日  
ヲ 將サニ 生セシトスル 用益者ノ 権利ヲ 害スル  
ノ 意思ヲ 以テ 爲サシ又ル者ナルトキニ 扱サレ  
ハ 責任ヲ 有スルコトナシ

第五十條

用益権ノ 発開及 期限存スル 場合ニ 於テハ 期限

ノ 到来ヨリニ 生スル 效果ノ 最大ナルモ ノハ



用益権ノ発用及期限存スル場合ニ於テハ期限

ノ到来ヨリシテ生ズル結果ノ最大ナルモノハ  
用益者ヲシテ果实ヲ取得スル権利ヲ得セシム  
ルコト是ナリ而シテ用益者ハ終極其権利ヲ行  
使スルコトヲ急ムルト至モ仍ホ之ガ為ニ虚有  
者ヲシテ利益ヲ得セシムベキモノニ非ズ  
縱令用益者ハ自カラ果实及生産物ヲ收取セカ  
ルニ已ニ其果实及生産物が土地ヨリ脱レタ  
ル以上ハ常ニ其所有権ヲ有スルモノナリ(冬者  
第ニ於ニ条)故ニ此ノ如キ果实ニシテ若シ猶現  
物ヲ以テ虚有者ノ手ニ存スルトキハ用益者ハ



回復ノ誅權：因テ虚有者ヨリ返還セシクルニ  
トヲ得心シ

然レトモ荒シ其果实ニシテ已ニ消費セラシメ

ルカ又ハ善意ナル買主ニ臺液シ且ツ引液サレ

タル時ハ用益者ハ惟虚有者ニ對シテ一個ノ債

權即チ人権ヲ有スルニ過ギザルベシ又虚有者

若シ善意ニテ即チ用益者ノ権利アルニトヲ知

ラズシテ果实ヲ收取シタルトキハ其虚有者ハ

現物ヲ以テ返還スルト價格ヲ以テ返還スルト

ヲ向ハズ凡テ其果实ヨリシテ自己ノ手ニ存ス

ル利益ノ限彊内ニ於テノニ返還ノ義務アルニ



ヲ向ハス凡テ其果実ヨリシテ自己ノ手ニ存ス

ル利益ノ限彊内ニ於テノニ返還ノ義務アルニ

止マレ例之ハ相統人ガ其相使人ノ他人ニ為シ

タル用益権ノ遺贈ヲ知ラザリシ場合ノ如キ是

ナリ

占有ノ実スル善意ノ結果ハ占有ノ章ニ於テ之

ヲ看ル心シ(中百九十四條)

用益者が虚有者ニ對シテ請求ヲ為スニ當テヤ

物上訴権ニ依ルト對人訴権ニ依ルトヲ問ハズ

虚有者が收獲及ビ果実ノ保存ノ為ニ為シタル

有益ノ費用ハ之ニ清算スルコトヲ要ス然ラザ



レハ用益者ハ是用ナクシテ果実ヲ得ルニ至リ  
結局虚有者ノ財産ヲ以テ自カヲ富マヌモノナ  
ル可ケレハナリ

用益者已ニ用益物ノ所有ヲ得タルトキハ用益  
者ハ自カヲ用益物ヨリ生スル果実ノ收取ヲ為  
スコトヲ得心シ而シテ其果実ハ虚有者ノ播種  
レ及ビ耕作セシ者タルト用益者自己ノ勞力ノ  
結果タルトテ悦ブコトナシ

此場合ニ於テハ用益者縱令虚有者ノ勞力ノ結果  
果タル收穫ヲ收取スルモ之カ由メ虚有者ニ對

シテ耕作ノ費用ヲ償還スルノ義務ナシ法律ニ



男々ル收獲ヲ收取スル元之が由メ虚有者ニ對

ニテ耕作ノ費用ヲ償還スルノ義務ナシ法律ニ  
於テ此ノ如ク定メタルハ屬困避ナル心キ討弄  
ヲ避ケ由テ以テ訴訟ノ原因ヲ防ガシが由メナ  
リ然レドモ一方ニ於テ甲益者ヲ以テ此利益ヲ  
得セシムル由メ又他ノ一方ニ於テ法律ニ虚有  
者ニ之ト同一ノ利益ヲ得セシメたり即チ甲益  
權終了ノ當時枝又ニ根ニ因テ猶土地ニ附着ス  
ル果實ハ何等ノ償還ヲおスコトナクニテ虚有  
者之ヲ取得スルニ至者第立於九条及ビ第五〇  
九条



第五十一條第五十二條及第五十三條

果實ノ取得ノ点ニ於テハ用益者ハ虚有者ト同一視セラル即チ用益者ハ其橋利ノ継続スル間  
凡テ果實ヲ取得スルモノナリ

惟次ノ一点ニ於テ相異ナリ即チ所有者ハ果實ノ未だ成熟セザル以前ニ於テ之ヲ收取スルコトヲ得ベキ收穫ノ先ツテ之ヲ讓渡シ又自カラ之ヲ毀滅スルコトモ亦其爲ニ得ル所ナリ然レドモ用益者ハ果實ノ已ニ成熟シタル後土地ニ新シタルトキハ此ノ點ニ於テ取得スルコト



又用益者ニ実ニテ法律ハ天然ノ果實ト法定ノ  
 果實ノ間ニ區別ヲ為シタリ此區別ハ所有者ニ  
 實ニテハ要スル必要アリ者ニ然リト云モ至テ自然  
 ニ生ズルニ果實ト人工ニ因テ生ズルニ果實ト  
 千人ノ耕作其他ノ勞力ニ由テ得ルニ果實トノ  
 間ニハ區別ヲ為スコトナシ凡テ天然ノ果實ハ  
 其土地ヨリ産シタリ時即チ其物産トありタリ  
 時用益者之ヲ取得スルモノナリ此ノ如ク用益  
 者が果實ヲ取得スル時ヲ定ムルハ用益権消滅



ノ場合ニ於テ其必要ヲ著ルモノナリ是レニ此  
時期ハ果實成熟ノ時ト定ムルコト能ハズ何ト  
ナレバ果實ノ成熟ハ時ト場所ト氣候トニ從ツ  
テ同一ナラズ故ニト一定ヲ得ザルモノナリ又  
果實ノ種類ニ由テ成熟ノ期ヲ異ニスルモノナ  
ラズ同一種類ノ果實トモモ亦然リ曰時ニ成熟  
スルモノニ此ナレバナリ

法律ニ本条ニ於テ果實ノ盗奪及ヒ事後ニ因テ  
果實ノ土地ヨリ離レタレバ場合ニ異ニ疑ヒ莫ク  
シケルガメ果實取得ノ問題ヲ決定セリ

17  
第二項ニ規定スル所ハ果實ノ何タルヲ問ハズ



17  
之ハ凡ク為メ果実取得ノ位置ヲ決定セリ

第二項ニ規定スル所ハ桑園ノ何ナルヲ問ハズ  
果実ノ成熟前土地ヨリ離レタル場合ナリ若シ  
此場合ニ於テ果実ノ成熟ニ至ルマデ仍チ用益  
権継続シタル時ハ此事情ニ於テ別ニ注意ヲ要  
スル所ノモノナリ然レドモ荒レ果実成熟ノ期  
ニ先外チ用益権消滅シタル時ハ其土地ヨリ離  
レタル果実ヲシテ用益者ノ手ニ歸セシムル時ハ  
是レ用益者ヲシテ不當ノ利ヲ得セシムルモノ  
ナリ故ニ用益者ハ虚有者ノ請求ニ基キ之ニ返  
還セザル心カラス



第五十四象

獸畜ノ生産物ニ笑ニテモ亦土地ノ果實ニ笑ニ  
ルト同一ノ原則ヲ畜用スルニ即チ獸畜ノ子及  
ビ我毛カ未ハ獸畜ヨリ分難セサレ時ハ之ト一  
俸ヲ有ニ而ニテ仍チ生産物ノ増殖ヲ有セサレ  
カ故ニ虚有者ニ属スルモノナリ

法定ノ果實ナルモノハ天然ノ果實ニ對シテ用フ  
ル名稱ニシテ法律ノ力ニ因リテ生シタル果實  
ナリ此種ノ果實モ亦天然ノ果實ト同シク定期  
ノ物ニシテ之ニ比シルハ却テ更ニ増殖スルモノ

ノナリ而シテ所有者又ハ用益者ニ對シテ天然ノ



ノナリシテ之ノ比シハ却テ更ニ極色々ノモ

ノナリ而シテ所有者又ハ用益者ニ對シテ此ノ  
果實ニ拘ハルモノナリ蓋シ法定ノ果實ハ第三  
者ニ附與シタルモノハ收益ノ報効トシテ其ノ  
三者が約定タル義務ヨリ生ズル所ノモノナリ  
猶ホ第二項ニ於テ法定果實ノ主タルモノヲ列  
記セリ

法律ハ用益者が法定ノ果實ヲ取得スルハ義務  
者タル中ニ若クハ辯済ヲ為シタル時ニヨリト定  
ムルニト能ハカリシハ此ノ如ク  
ナレトキハ義務者ノ過失ニ因テ弁済ヲ為スル心



キトキニ之ヲ友ナズ家ニ義務ノ履行ヲ摩止シ  
テ甲益権ノ消滅ノ後ニ至リ又シガ友メ甲益者  
ニ更ニ及ん所ナキニ至ル如キ不幸ヲ者ルハ之  
之ニ及シテ法定ノ果實ニ年流ヲ友スルキトキ  
昂ク之ヲ請求シ得ルキトキニ於テ甲益者有  
スルモノト定ムルコト雖モ之州ニ此ノ如ク  
スルトキハ若シ甲益権継続スル間ニ於テ果實  
ヲ并流スルキトキニ其全部甲益者ニ屬シ之ニ  
及シテ若シ其年流期ニ及ルテ甲益権消滅シタ  
ルトキハ甲益者ニ更ニ得ル所ナカレハ心シ

然リト動モ此ノ如ク得ル所ノ事ノ友ニ利益ト控



ルトキ人用益者ハ更ニ得ル所ナカレハ心シ

然リト事ニ此ノ如ク偶然ノ事ノ有ニ利益ト控

失トテ成セシムルハ法律ノ欲ムル所ニ水ヲ不

此ノ如キハ情混雜ト争訟トテ避クルニ必チ

凡情一ノ方法ナレ場完ニ致テノ之ヲ用テ心

之例之ハ用益者ガ其權利ノ總力ニ救済長ク

継続スルト然ラザルトニ終ヒテ全ク偶然ノ既

果ニ因リ天然ノ果實ノ全部ヲ取得シ又ハ然ラ

テ人ノ區別ヲ有スガ如キ是ナリ

然レトモ法定ノ果實ヲ組成スル至額ノ給附ニ

付テハ理諦上ヨリ之ヲ諦スルトキハ之ヲ辨済



之レモノハ毎日日ツ始ニド毎時ノ之ガ年済ヲ  
 為スコトヲ得心ク又為スコトヲ要スルモノト  
 謂フコトヲ得心シ惟實際ニ於テハ到底此ノ如  
 クナレト能ハズ故ニ多少相隔タリタル年済  
 ノ期限ヲ定メ定期ニ之ヲ為スコトヲ認メサレ  
 ヲ得ル也凡ソ用益権ノ始メ若クハ終リニ於テ  
 此金額ノ半分が用益者ニ帰シ半分が虚有者ニ  
 帰ス心キヤヲ決スルニハ此金額ヲ日刻ト爲シ  
 而シテ用益者及び虚有者ヲシテ其權利ノ継続  
 シタル時間ノ刻定ニ應心之ヲ取得セシムルヲ

以テ最モ正当ナル方法ト謂ハザルヲ得ズ



之々ル時節ノ刻念ニ應心之ヲ取捨せしムルヲ  
以テ最モ正當ナル方法ト謂ハザルヲ得公

又天然ノ果实ニ此ノ如ク正確ニ分ツコトヲ得

ザル心シト爲テ金錢ニ容易ニ然ルヲ得心キコ

トヲ注意ス心シ茲ヲ以テ法定果实ノ所得ニ實

ニル原則ハ若シ茅三表ノ糸府スヤキ所ノ物、農

産物等ニシテ金錢十ヲザルコト例之ハ分果、耕

作ノ場合ニ於ケル如キトキハ其適用ヲ受ク心

キニ此ガルナリ(參看第五〇九條)

茅土於糸

一回ノ使用ニ因テ消費ス心キ物ニ實ニ利益者



ノ權利ヲ普通ノ場合ト異ラセザル時ハ此ノ如  
キ種類ノ物ノ利益權ハ欲ニド実益十カルハ  
何トナレド消量物ハ果実即チ定額ノ生産物ヲ  
生ズルモノニ似テズ其使用ハ即チ之ヲ消費ス  
ルノ誤ニシテ定額ノ權利ト區別スルコト能ハ  
ズ此時ニ當リ若シ利益者ニシテ定額ノ權利ヲ  
有スルコトナクハ利益者ハ使用ヲ為スコト能  
ハズ是レ其權利ハ何等ノ利益ヲモ與ヘザル  
心シ例ニシテ法定ノ果実ヲ生ズ得ルキ金錢ト  
モ實債又ハ之ト類似ノ方法ニ由テ他人ニ之ヲ

譲渡シタルト云フコトガザレハ此種力ヲ生ズル



之實借又ハ之ト類似ノ方法ニ由テ他人ニ之ヲ

譲渡シタルト云ハ此種力ヲ生ズル

コト能ハカバナリ

故ニ消費物ノ用益權ノ場合ニ於テハ用益者ヲ

之ヲ部分ノ權利ヲ得セシムルコト必要ナリ(答)

者第於七条然レトモ用益者ハ其權利ノ消滅シ

タルトキ必ズ現物ニテ同量及ビ同種ノ物ヲ返

還スルカ又ハ金錢ニテ是ニ均シク價額ヲ返還

セザル可カバナリ

右ノ場合ニ於テ現物ヲ以テ返還スルト價格ヲ

以テ返還スルトノ選擇ハ用益者ヲ之ヲ之ヲ為



サシ又ズ又虚有者ヲシテ之ヲ定メシハルコト  
 ナシ一、用益権設定ノ時用益物ノ評價ヲ考シ  
 又ルト否ト事情ニ從ツテ此區別ヲ為セリ  
 消量物ノ用益権ノ場合ニ於テ用益者ノ得心キ  
 利益ハ特定物ノ用益権ノ場合ト異ナルコトナ  
 シ即チ用益者ハ其権利ノ継続スル間金錢ノ利  
 息ヲ取得スルモノナリ此事ナルヤ若シ用益権  
 ノ目的トスル所ノ物金錢ナルハキハ年ヲ換テ  
 之シテ明カナル心ニ然ラズシテ消量物ヲ目的  
 トスルトキハ用益権ノ消滅シ又ハ時ニ依リテ

其性質を即チ必  
 定テ無消スルノ  
 義務ナキガ



ト之レトキハ用益橋ノ消滅シタル時ノ如クハ

レバ其價格即チ必多ク昇降スルノ義務ナキガ  
故ニ此時ニ至ルマデ用益者ハ自己ノ所有ニ属  
スル金錢ヲ他ノ用ニ供ヒテ之ガ利益ヲ收ムベ  
キナリ

高業ノ資本ヲ組成スル高業ハ其性質上必ズシ

モ一回ノ使用ニ由テ消費スルモノニ非ザルベ

シ此ノ如クナリ場合ヲ以テ尤モ善道ナリ

ト之創之心織物衣服家具等ノ高業ノ如シ然レ

ドモ此業ノ高業ニシテ高業資本ヲ組成スルト

キハ其用益橋ヲ得タルモノハ之ヲ販賣スルヲ



以テ使用ノ方法ト考フ此時ニ當リ若シ用益者  
之ヲ量ルニト能ハズトセバ用益権ハ至リ無用  
ノモノナルハ心シ故ニ一方ニ於テハ用益者ヲシ  
テ之ヲ量ルニト得セシメ而シテ用益権  
消滅シタルトキハ同量同額ノ高子ヲ償還セシ  
メ若シ當初高子ノ評價ヲ爲シタルトキハ其價  
格ヲ返還セシム實際ニ於テ尤モ多クハ高子ノ  
價格ヲ評價シタル場合ナルベシ

第五於六条

本条ハ其モ困窮ナリ所ナシ用益者が本条ニ掲

ル所ノ物等ヲ使用スルハ同量同額ノ高子ヲ



本条ハ其モ困被テハ所ナシ用益者ガ本条ニ掲

列ル所ノ物權ヲ使用スルハ固ヨリ当然ノ事ナ

リ此等ノ物ニ関シテ用益者ノ權利ハ一ニ其使

用ヲ及ズニ止マルモノトニ何トナシハ此ノ如

キモノハ果シテ生ゼザルハナリ然レドモ本条

ノ遺言ヲ以テ本条才ニ常ニ規定スル使用權ト

混同スルコトナキヲ要ス使用權ヲ有スルモノ

ハ自己及ビ其家族ノ使用ノ限彊内ニ在テ物ノ

使用ヲ及ズ權利ヲ有スルニ止マ人之及ビテ

用益者ハ本条ノ如キ場合ニ就テ單ニ使用ヲ有

スニ止スルトモ仍ホ左ノ範圍以外ニ就テ使



用之ルコトヲ得ヤ故ニ他人之ヲ貸借フルコト  
ヲ得ルモノナリ

用益者が此ノ如キ種類ノ用益物ヲ貸借スル権  
利ニ関シテハ法律ヲ以テ之ヲ確認スルト同時  
ニ仍由其制限ヲ定メたり何トナレハ若シ此制  
限ヲ明記セザルトキハ如何ナル場合ニ於テモ  
当然用益者ハ此種ノ用益物ヲ貸借シ得ヤキモ  
ノト看做サルベクナリ例之ハ虚存者ノ親  
属又ハ友人ノ眞実等ノ如ク虚存者自カニ必ズ  
他人ニ貸借スルコト莫カルベキ物權ニ至テハ

用益者が之ヲ貸借スルコト其当ヲ得たりト謂



他人に貸貸スルコト莫カル心キ物橋ニ至テハ

用益者が之ヲ貸貸スルコト其当ヲ得タリト謂

フコト能ハズ又虚有者ノ書庫執中若シ其書庫

ニシテ美麗ノ粧飾ヲ要シ日ツ其保好ノ友ニ充

分ノ注意ヲおサツル弟三者ノ使用ニ依リ毀損

ス心キモノ十ル時ニ之ヲ貸貸スルノ橋利ヲ用

益者ニ拒絶スルハ是レ又至当ノコトナリト謂

フ心シ

弟立於七全

終身年金橋ニ定マリタル人ヨリ橋利者ノ終身

又ハ特ニ指定ニタル弟三者ノ終身ヲ期シ年金



ト稱之ル定期ノ給付ヲ要求スルノ権利ナリ  
概シテ年金金橋ハ人橋ナリ即チ金橋又ハ濃量物  
ヲ目的トスル一個ノ債権ナリ之ヲ設定スルコ  
ト或ハ贈與又ハ遺言ニ因テ無償ナリコトヲ得  
心ニ或ハ不意産動産又ハ金銀ノ譲渡ノ報酬ト  
シテ有償ナルコトヲ得心シ

年金金橋ヲ有スルモノが其権利ノ用益権ヲ他人  
ニ譲渡スコトヲ得心シ此場合ニ於テハ年  
金金橋ノ用益者ハ年金金橋者が死亡セザル限りハ  
自己ノ終身乃至年金金橋より生ズル利益ヲ受ク心

コトヲ得心シ此ノ如ク用益者が利益ヲ受ク心



自己ノ終身乃至金権ヨリ生ズル利益ヲ受クシ

コトヲ得ル心シ此ノ如ク用益者が利益ヲ受クル

時多ク年金権者終身ニ限リタルニ蓋シ年金権

継続期ニ其義務ヲ負担スルモノ、意思ナク己

テ他人邊リニ之ヲ使ハシ得ルカヲサシムナリ

此場合ニ於テ法律ヨリテ用益者ノ権利ノ範圍

ヲ明示セザルトキハ或ハ疑ヲ生ジ得ベシ

用益者ハ惟用益物ノ果實ヲ收取スルコトヲ得

ルノ三ニシテ用益物ヲ滅失セシメ又ハ其本質

ヲ傷テフコトヲ得ズ故ニ用益者果實ヲ收取ス

ルトキハ<sup>其</sup>年金ハ永久ニ受テルコトヲ得心ス



ノ十ヲサレガ故遂ニ年金権消滅スルト云ハ用  
 益者ハ悦ビ年金ヲ受取ルト同時ニ其元本ノ一  
 部分ヲ消費シタル加如ク感アル心ニ然レドモ  
 終身年金権ニハ元本ナルモノ有ラズ年金ハ年  
 金権ニ由テ生シタル所ノモノナリ若シ年金権  
 が権利者ノ死亡ニ因テ消滅スルコトアルモ是  
 レ不確定ナル期限ノ到来シタル為ニ権利消滅  
 シタルノ之故テ年金ヲ收取シタルカ否ニ年金  
 権ノ元本ヲ消費シタルニ非ラズ何レナシハ  
 或レ場合ニ於テハ年金ヲ收取スルコト甚々短

シテテ忽チ年金権ノ消滅ヲ来スニト有ル心ナ



或ハ場合ニ於テハ、年金ヲ收取スルコト甚々短  
クシテ忽チ年金撥ノ消滅ヲ来スニト有ルハケ  
レハナリ

一、個ノ用益権ヲ目的物トシテ第二ノ用益権ヲ  
設定シタル場合ニ於テモ之ニ適用スルハ原則  
ハ右ト同一ナリ第一ノ用益者ハ第一ノ用益者  
ノ如ク甲益物ノ果実及び生産物ヲ收取スルハ  
然レドモ第二ノ用益権ハ其消滅原因ニ重ナル  
心シテ第二ノ用益者ノ死亡及び第一ノ用益者ノ  
死亡是ナリ蓋シテ第二ノ用益者死亡スルトキハ  
普通ノ原則ニ依リ権利者ノ死後甲益権ヲ他人



ニ相續セシムルコト能ハザルヲ以テ第一ノ用益者死  
益権が消滅スルハ明カナリ又第一ノ用益者死  
亡シタルトキハ第一ノ用益権消滅シテ第  
二ノ用益権ノ目的物滅失スルガ故ニ是レ又第  
二ノ用益権ヲ以テ消滅セシムルコト当然ナリ  
第ニ於ハ条

高群ハ第於六条ニ於テ規定シタル集合物ノ一  
種ナリ既ニ高群ト稱スル以上ハ數個ノ物ヨリ  
組成スト由テ相集リテ想像上一個ノ体ヲ有ス  
モノト看做セリ高群ノ性質此ノ如クナリヲ以

テ一頭ノ獸猶存スルコトモハ其他ノ獸ハ死



天ノト看做セリ高群ノ性度此ノ如クナリテ以

テ一頭ノ獸猶存スルトキハ其他ノ獸ハ凡テ死  
ニタルトキトキモ之ヲ目的トスル甲益権ハ仍  
チ存スルモノナリ而シテ一方ニ於テハ甲益者  
ハ其高群ヨリ生じタル子ヲ以テ其缺ヲ補フノ  
義務アリ然レドモ、叔高群ニシテ甲益者ノ遺失  
ナク其全部又ハ一部ニ於テ滅失シタルトキハ  
甲益者ハ其價格ヲ償還スルノ義務ナシ何トナ  
シハ特定物ノ義務者ナシハナリ  
甲益者ハ善良ナシ管理ノ如ク收益スルコトヲ  
要スルガ故ニ死亡ニ因テ生スル高群ノ不足ヲ



神フコトナクシテ其高群ヨリ生ズル凡テノ子  
ヲ賣却スルコトヲ得ズ又甲益者ハ死ヨリ生  
ズル不足ヲ神ニ而シテ猶餘リタリ子ヲ利ズル  
ニ止マルモノニハ此ハ高群ノ中已ニ充分ノ養  
育ヲ爲シ了リ而シテ其飢養ズル利益ナクシテ  
徒ラニ費用ヲ要スル如キモノアル時ハ毎年之  
ヲ五分スルコトヲ得ル可カラズ蓋シ是レ善  
良ナル所有者ノ宜シク爲スベキ所ナシハナリ  
不足ヲ神ニ猶餘リタリ子ヲ甲益者カ賣却シタ  
ル後疾病其他ノ事故ニ依リ高群ニ不足ヲ生ズ

用益搖消滅ノ跡ニ至テ猶ホシテ補給スルコト



ル後疾病其他ノ事故ニ依リ畜群ノ不足ヲ生シ

用益権消滅ノ時ニ至テ猶ホ之ヲ神充スルコト

能ハカリシ時ハ用益者が当初おシタル壹却ハ

有効ナルモノナルヤ否ヤヲ決スルモ亦右ニ掲

クルト同一ノ原則ニ因リザル可カラズ今百款

ヨリ組成セル畜群ヲ飢養セシム欲スル善良ナ

ル愛護人ハ畜群ノ子ヲ得ルニ當ツテヤ決シテ

己ニ不足スル所ヲ補フニ止メザルハ必ス仍

ホ其年内ニ生ズルコト有ルハキ不足ヲ補フカ

メ死亡ノ平均数ニ基キテ計算シタル数ハ其總

ニ遺シ置ルコト勿論ナリ而シテ用益者が当初



受取リタル畜群ノ致ヲ減セザルハ其ノ其尽マ  
心キ所ノ長功ナリ

第五拾九條

熟シノ國ニ於テモ樹木及ヒ森林ニハ種々ノ性  
質アリテ自カク其產物ノ收獲法ニ影響ヲ及ボ  
スモノナリ此種ノ財産ヲ利用スル方法ヲ名ケ  
テ採伐法ト稱フ

樹木ノ性質ニ依リ一旦採伐シタル後仍ホ其株  
ヨリ芽ヲ發スルキモノナシハ定期ニ之ヲ採伐  
スルヲ以テ通例ト爲ス例ニハ廿年毎ニ採伐ヲ

若クハ如シ



考ムガ如シ

樹林產物ニハ工作用ノ木材タルハキ或ハ薪炭  
又ハ粗糞ニ用フベキモノアリ要スルニ此ノ如  
ク定規ノ採伐ニ供シタル樹林ハ之ヲ名ケテ小  
樹林ト謂フ若シ其樹林ニシテ廣大ナルトキハ  
毎年又ハ二年毎ニ收入ヲ得ント欲スルガメ之  
ヲ廿区又ハ十区ニ區分スルガ如キコトアリ或  
ハ五分ノ一宛ヲ四年毎ニ採伐スルコトヲ定メ  
又ハ四分ノ一宛五年毎ニ採伐スルコトヲ定メ  
此ノ如ク採伐ノ方法一變定マルトキハ長ク



之ヲ慣行スル者ニシテ是レ莫ク採伐法ヲ組成  
 スルモノナリ然レトモ樹林ノ善良ナル管理者  
 ノ方又所ニ依レテ定規ノ採伐ヲ有ストキニ当  
 リ樹林中ノ叢々ニ尤モ良質ナル樹木即チ最モ  
 能ク成長スベキ樹木ヲ保存シ決シテ悉ク採伐  
 シ尽スコトナシ而シテ此等ノ保存ニ及ル樹木  
 〃他ノ樹木ノ成長ヲ妨ゲズ他日ニ至リ高價ナ  
 ル大樹木トナルベシ何トナシカ再ビ採伐ヲ有  
 スノ如ク至ルモ仍ホ之ヲ保存スベクシ心ナリ  
 所有者自ラ樹林ノ利用ヲ有ス場合ニ於テハ右

〃此ナル如キ保存木ト其他ノ定規採伐ヲ有ス



所有者自ラ樹林ノ利用ヲ為ス場合ニ於テハ右

ニ述ブル如キ保存木ト其他ノ定規採伐ヲ為ス  
心キ樹木トノ區別ハ敢テ緊要ノ者ニ非ズトモ  
モ用益者ガ利用ヲ為ス場合ニ於テハ甚ハ緊要  
ナリトス蓋シ一個ノ樹木ニ已テ既ニ保存木ノ  
性質ヲ有スルモノナル時ハ用益者ハ決シテ<sup>ハ</sup>  
樹林ノ如ク之ヲ採伐スルコトヲ得ズ必ズ之ヲ  
成長セシメサル可カラズ何トナシハ次第ニ定  
ムルガ如キ是レ果實ニ非ズトテ一ノ元本又シ  
ハナリ

國府縣郡市町村等ニ屬スル樹林ハ他ノ模範ト



十九、心ヲ善良ナル利用ノ方法ニ據ラザル可カ  
ラズ然レドモ法律ハ此等ノ樹林ヲ以テ各人ノ  
有ズル樹園ノ上ニ位スルモノト爲サズ法文ノ  
示ス所ニ依シ心寧ク其反對ニ出ツルモノト認  
フヤシ

採伐方ノ未タ確カニ定ラザル樹林ニ付テハ其  
採伐ヲ爲ス一ヶ月以前ニ於テ用益者ヨリ產有  
者ニ之ヲ通知スルノ義務アルモノト定メタル  
ハ蓋シ虛有者ヲシテ採伐ノ方法ニ意見ヲ述ベ  
及ビ其採伐ノ監督ヲ爲スコトヲ得セシムルノ

目的ニ出ツルモノナリ



及ヒ其採伐ノ監督ヲおスコトヲ得セシムルノ

目的ニ出ツルモノナリ

第六拾章

用益者が立地ノ採伐ヲ為スニ當リ所有者既ニ  
 保存シタル新田ノ大樹木アルトキハ用益者ハ  
 之ヲ採伐スルコト能ハザルハ勿論ニシテ地権  
 者ノ所有者ノ慣習ニ依リテ其樹木ニ支線ヲ引キ  
 及ビ之ニ空氣ノ流通ヲ容易ナラシムル為ニ立  
 地ニ其保存木ノ若干ヲ採伐スルノ空メナル時  
 ニ限リ此種ノ樹木ヲ採伐スルコトヲ得心  
 此規則ハ膏脂質ナリ樹木ノ表裏ニ付テモ亦同



一ナリ蓋シ此ノ如キ性質ノ樹木ハ一交採伐之  
ルトキハ更ニ其採ヨリ芽ヲ発スルコトナキヲ  
以テ其性質上採伐ヲ或スハキ樹木ニ訓ラズ即  
チ凡テ採伐本トシテ看做スハキモノナリ也レ  
トモ習慣上其中若干ノ樹木ノ発育ヲ容易ナラ  
シムル者モ其他ノ樹木若干ヲ定期ニ採伐シ或  
ハ拔去ルコト必要ナルハシ此ノ如キ習慣存ス  
ルトキハ同益者モ亦之ヲ出シ得ハシ  
同益者ニ於テ採伐本又ハ大樹木ヲ採伐スルノ  
権利ヲ有セサルトキハ惟モ其樹木ヨリ生スル

期ノ産出物ヲ收取スルヲ得ルニ止マル而已テ



権利ヲ有セサルトキハ惟其樹木ヨリ生スル定

期ノ産出物ヲ收取スルヲ得ルニ止マル而シテ  
其産出物ト云フハ木葉果実枯枝及び時々採伐  
ヲ必要トスル小枝ヲ謂フ又法律ハ用益者が枯  
木又ハ風ノおこ折ラタニ樹木ヲ用テ其用益  
権ニ屬シタニ産物ノ修繕ヲおスコトヲ許シタ  
リ加之テラズ用益者ハ猶モ其修繕ノ為ニ必要  
ナル場合に於テハ生木ヲ使用スルコトヲ得バ  
之を以テ教テ用益者ノ利益ヲ旨トスル規定ノ三  
ニ此ラズ猶モ所有者ノ利益ヲ圖テ設ケタルモ  
ノナリ



用益者が採伐せむル株ヨリ芽ヲ生セザル性  
 質ノ大樹ホモルニ保存本ヲ使用スル權利ヲ有  
 スルトキハ之ヲ採伐スルノヲ止ムルコトヲ  
 得ズ仍ホ之ヲ採取リテ他ノ苗本ヲ植付クル  
 コトヲ要ス何トナシハ美意ナシ管理人ノ如  
 ヲ收益スルモノト得フコトヲ得サレバナリ  
 法律ニ於テ明カニ之ヲ断定セズト雖モ用益者  
 ノ原則ニ由テ容易ニ決スルコトヲ得心キ一箇  
 ノ問題アリ即チ左ノ如シ用益者が小樹木ノ芽  
 一ノ採伐ヲ爲ストキニ當リ保存本ト爲スニ最

毛良好ナル樹木ヲ採シテ用益者之ヲ保存スル



一ノ採伐ヲ考ストキニ當リ保存本ト爲スニ最

モ良好ナル樹木ヲ擇ンテ用益者之ヲ保存スル

ノ義務マルヤ否ヤノ問題是ナリ蓋シ用益者ノ

利トスル所ハ保存本ヲ潰サツルニ在ルヤ明カ

ナリ何トナレバ一旦保存ニ付ル樹木ハ用益者

其後ニ放テテ之ヲ採伐スルコトヲ得ナル可ケ

レハナリ

然レドモ屢述ブル如ク用益者ハ善良ナル為理

人ノ爲メ如ク收益ヲおサツル可カラズ且ツ樹

林ニ冥シテハ特ニ近傍ノ所有者ノ慣習ニモ亦

從ツテ收益セガル可カラズ然ルニ善良ナル管



理人及び近傍ノ所有者ハ、四ノ事ニ保存本ヲ遺  
ニシ置クハ、固ヨリ疑ヲ容レザルナリ、惟其採伐  
ノ心キ樹木ト保存スル心キ樹木トノ間ニ定ムル  
キ員數ノ刻意ヲ定ムルニ至テハ、多少ノ困難アリ  
ル心ニ故ニ此點ニ付キ、慮有者ト用益者トノ間  
ニ協議整ハザル、如キ場合ニ於テハ、鑑定ニ附シ  
タル後、裁判所ニ於テ之ヲ判決スル心キモノトス  
ル、此於一糸

本条ニ記載シタル用益者ノ權利ハ、固ヨリ些少  
ナルモノニシテ、此收益ノ方法及び其範圍ニ至

テハ、在ク用益者ヲ以テ所有者ニ準シタルヨリ



十九 十九ノニシテ此收益ノ方法及び其範圍ニ至

テハ在ク利益者ヲ以テ所有者ニ準シタルヨリ  
生知ル 結果ナリ即チ善良ナル所有者ハ其土地  
ノ利用ニ必要ナル些末ノ樹木ニシテ其土地ヲ  
害スルコトナク其土地ヨリ採ルコトヲ得心キ  
トスル決シテ之ヲ他ヨリ特ニ購取スル如キコ  
トナキハ勿論ナリ

第六節 二条

第六十八 土地ノ所有者行使シタル樹木ニ代  
ラシムル為メ又ハ生垣ヲ栽植スル為メ或ハ樹  
木ヲ斫ル為メ其土地ニ苗木ノ培養場ヲ設ケ



送シコト往々是アリ

右ノ如キ培養場存スル場合ニ於テハ用益者モ亦此培養場ヲ使用スルコトヲ得心シ蓋シ用益者ニ善良ナル管理者タル心キモノナルヲ以テ之ヲ使用スルハ欲シトモ其奉分ト謂フコトヲ得心シ加之ノミナラズ其床ノ產物ヲ其土地ノ用ニ供シテ仍ホ剩餘アルトキハ法律ハ用益者が之ヲ賣却スルコトヲ許シタリ又用益権ノ主タル目的物が苗床ニシテ其他ノ土地ノ部分ト多別セリシムル場合ニ於テハ用益者か其苗床ヨ

リ生ズル苗木ヲ賣却スルノ權利アルベキコト



別セヨシムル場合ニ於テハ用益者カ其苗床ヨ

リ生ズル苗木ヲ売却スルノ権利アルベキコト

ニ当然ニシテ例外ニ非ラザレバナリ

然レドモ基床ノ培養者樹木ノ性質ニ従ヒ評價

又ニ種子ヲ以テ之ガ保持ヲ図ラサルトキハ其

苗床ニ自然ニ消滅スルニ至ルハ已茲ヲ以テ用

益者一方ニ於テ苗床ヲ使用スルノ権利アルト同時ニ之

ガ保存ヲ謀ルノ義務アルモノナリ

### 第六於三条

本条ノ場合ニ於テ用益者ノ権利ヲ定ムル為メ

法律ガ用益権ノ発効ニ及ル當時ニ於テ段ニ石



坑ノ採掘ヲ始メタルモノナリシヤ否ヤラ區別  
 スルハ決シテ理由ナキコトニ訓ラズ至ク利益  
 者ノ權利ヲシテ用益權設定者ノ意思如何ニ拘  
 マラシムルノ旨趣ニ出ツルモノナリ而シテ設  
 定者ノ意思ヲ考フルニ從來設定者自カク其石  
 坑ヨリ定期ノ利益ヲ得タル場合ナトキハ用  
 益者ニ此定期ノ利益ヲ得セシムルコトヲ欲セ  
 ザリシモノトハ想定シ得ベカラザルナリ之ニ  
 及ビテ用益權設定ノ時未知石坑ノ採掘ヲ始メ  
 ザルモノナリトキハ用益權設定者ハ其地内ニ

採掘セザルニシテ其



かんてノ十儿トキハ用益後設定者ハ其地内ニ

経本採掘セラレザル石坑ヲ採掘セシメ以テ其  
土地ノ價格ヲ減少スル如キニトテ用益者ニ許  
スノ意思アリザルハ己用益権設定者ノ意思此  
ノ如クナル可キヲ以テ経本既ニ採掘シタル石  
坑ニ用益者モ亦之ヲ採掘スルコトヲ得レトモ  
然ラザル場合ニ於テハ用益者其石坑ノ收益ヲ  
得ヌコト能ハザルモノトス此原則ハ既ニ定期  
採伐ニ附セザリシ樹林ノ利用ノ事項ニ適用シ  
タルモノト至ク同一ナリ又用益者ハ用益権ノ  
目的タル不動産ノ修繕ノ為メ此等ノ樹木ヲ使



用之ニトヲ得ハト同シク此ノ如キ需用ノ為  
ニ石其他ノ材料ヲ取ルコトヲ以ルモノトス經  
令大修繕ノ由ニ訓ヲスニテ小修繕ノ為メナ  
トキモ亦然リ

之ニ及ニテ用益者ハ土地ノ改良ノ爲ニハ樹木  
若クハ石ヲ使用スルコトヲ得ザルナリ何トナ

ルハ改良ノ千態ヲ狀ニシテ且ツ屬之ヲ期図セ  
シモノハ希望ニ適合セザルコト有ルヤキヲ以  
テ立法者ハ此ノ如キ不確ナキ事ノ爲ニ慮有

者ノ利益ヲ生ズル如キニトアルヲ欲セザルハ

ナリ



者ノ利益ヲ生ズル如キコトアルヲ欲セリシハ

ナリ

又田多者、其土地ニ存ムル泥炭ニ依テ又右ニ  
掲列ル所ト同シ、其泥炭坑ガ用益権矣、開ノ時  
既に採掘セラルタレモ、其ノニ訓ヲガシハ、總令自  
己ノ需用ノ為メト、専モ之ヲ使用スルコトヲ得  
サレ、心シ何トナレハ、泥炭ハ可燃物ニシテ  
土地ノ利益ノ為ニ使用スルコトヲ得、サレモノ  
ナレハ、ナリ、之ニ及ビテ肥料土ニ至テハ、常ニ土  
地ヲ肥沃ナラシムル為ニ用フルコトヲ得、心  
用益権矣、開ノ時、之ニ肥料土ノ採掘ヲ為シタレ



場合ニ於テハ用益者ハ自カク此肥料土ヲ使用  
スルノミナラズ仍ホ之ヲ棄却スルコトヲ得ル  
ニ何トナシバ此場合ニ於テ肥料土ハ所有者ノ  
為ニ果実ノ性質ヲ有ス人モナシバナリ  
第立於四条

埋藏物ハ固ヨリ土地ノ產出物ニ執ラサルコト  
言テ俟ザル所ニシテ實ニ其存ニタル土地ト至  
リ別物ナルモノト認ハザルヲ得之而シテ用益  
者加其用益物權中ヨリ是見セラレタハ埋藏物  
ニ依キ自カク權利アリト主張スルニハ惟埋藏

物ハ其物ハ  
ニ於テ是等ニ因リ是見セラレ



ニ女キ自カ子核利アリト主張スルニハ惟

物ハ其物ニシテ添附ニ因リ發見セラル

タルノ外ナカレバ此添附タルヤ揮

物ナレバ言葉ノ意義ニ由テ之ヲ考フル

益權設定ノ時當事者ノ豫想セザリシ

ト明カニシテ用益者ガ之ニ自キ利益ヲ

トヲ望ムニ至当ナリト認テ可カラス

物トハ偶然ニシテ發見セラルタルコト

トスルモノナリ又此添附ハ或ハ場

地ノ他ノ危峻ノ賤價トシテ所有者ヲ

利スルモ



ノニモ此ヲ不故ニ用益者モ亦流附ノ利益リ  
クハキ理由ヲ存セサレナリ若シ用益者自ラ  
埋藏物ヲ発見シタル場合ニ於テハ右ニ述  
所ト異ナリトモ是レ甲益者又ハ盜掘ニ於  
特別ノ利益ヲ得ルニ此ヲ不惟発見者又ハ故  
以テ法律ガ発見者ニ認メ又ハ善通ノ權利ヲ有  
スルニ止マルノニ(参考財産取得條第五條)

第五條

狩獵及ビ捕魚ハ無主物ノ所有權ヲ取得スルノ

方法ニシテ此事ハ所有權ヲ取得スルノ方法中

先ト如キル方法ヲ規定スルニ於テ是ヲ



方法ニシテ此事ハ所有権ヲ取得スルノ方法中

先立トスルル方法ヲ規定スルニ方テ更ニ之ヲ  
詳説スルニ参考財産取得編中三章(用益者カ所  
有者ト同シク此權利ヲ行フコトヲ得ルハ当然  
ナリトス何トナレハ狩獵及ビ捕魚ノ產物ハ宝  
期ニ生スルノ三十五五五五五五五五五五五  
ナレハナリ

第六十六章

本章ニ記載セル如ク地役ノ右ニハ後ニ特別十  
ル一章ヲ設クヘシ今ハ悅地役ハ一個ノ土地ノ  
所有者ヲシテ他ノ人ニ屬スル土地ヨリ自己ノ



土地ノ優格ヲ増加之人便益又ハ約務ヲ多クシ  
コトヲ得セシムル所ノ権利ナリトヲ指示ス  
レバ即チ是レト爲ス例之ハ隣地ニ於テ有ス  
ル通行権、給水権、眺望権等ノ如キ<sup>即チ</sup>是ナリ地役ハ  
其土地ノ所有者又ハ分限アル以上ハ其人ノ誰  
カルヲ割ハス凡テ此分限アルモノニ属スルヲ  
以テ之ヲ形容シテ地役ハ土地ヨリ其物ニ属ス  
ト云フニ至ル是レ蓋シ地役ヲ用益権、使用権  
ニ比シテ對シテ土地ノ幾即チ物ノ役ト稱之  
ル所以ナリ蓋シ用益権、使用権ハ居住権ニ比

令其自便ヨリ者レハ物權ニシテ命ニテ其權利



ル所以ナリ蓋し用益権使用権及居住権ハ終

令其物産ヨリ者レハ物権ニシテ而シテ其權利

ノ存之し目的物ヨリ考フレハ其ハ動産権ナリ

又ハ不動産権ナリト云々此等ノ權利ハ特定ノ

人ニ屬ス且ツ人ト共ニ消滅ス人ヲ以テ之ヲ終

ニテ人ノ役ト名クルモノナリ

若し用益権ノ目的タル土地が其隣接之人土地

ノ上ニ右ニ出フルル地役ノ權利ヲ有セシト

キハ用益者ニ於テ之ヲ行使スル權利アルハキ

ニト勿論ナリ蓋シ之ヲ行使スルノ權利ヲ有ス

ルノミナラズ此行使ハ均シク用益者ノ義務又



ルハ何トナシ此權利ノ行使ヲ怠ルトキ  
ハ不使用ニ因テ地役ノ消滅ヲ致スルコト

自己ノ懈怠ニ由テ虛有者ノ有ル權利ヲ消滅

セシメタルトキハ用益者其責任ヲ受ルコトキニ

批ラザレバナリ而シテ不使用ニ依ル地役ノ消

滅ハ承役地ノ存ニ在リテ受責時効ノ如キモノ

ニシテ仍ホ地役ノ章ニ於テ之ヲ述ブベシ

### 第六條

凡ノ裁判所ニ於テ提出スル訴件ハ概シテ其

目的即チ訴權ニ由テ認知セシメ且ツ効用ヲ全

カラシメントスル權利ニ屬シタル如キモノ有ル



目的即今訴権ニ由テ認知セシメ且ツ効用ヲ全

カラシメントスル權利ニ屬シタル如キヲ有スルモノナリ是レ物権及ビ人権ノ區別ニ依ツテ訴権ニ物上ノ訴権及ビ對人ノ訴権アリ所以ナリ

本案ニ就テ甲益者ノ方ニ認許セ入請權ノ訴権

ハ皆物上訴権ナリ何トナシハ甲益者ノ權利物

権ナレバナリ此故ニ甲益者ハ此訴権ニ依リ單

ニ虛有者ニ對シテ自己ノ權利ヲ對抗スルコト

ヲ得心キノミナラズ必チ凡テ妨礙ヲ爲スモノ

アルトキハ何人ニ對スルモ之ヲ對抗スルコト



ヲ得心ニ然リト爲モ用益者ニ此訴権アルガ由  
メ致テ用益者ニ用益権ヲ設定シ又ハ契約又ハ  
遺言ニ因リ特ニ虚有者ニ對シテ行フニトシ得  
心キ對人ノ訴権ヲ有セスト謂フ可カラズ

本条ニ於テ用益者ニ屬スルモノト認メラシメ  
ル物上訴権ニ并ニ三十二條ニ依リ所有者ノ有ス  
ル訴権ト同一ノ名稱及ビ同一ノ目的ヲ有スル  
モノナリ唯ハ用益権ニシテハ所有権ナシ  
ヲ以テ其権利ノ性質ヨリ生ズル一ノ差異アル  
ニ止マル故ニ本條ノ訴権ハ常に権利ノ基本ヲ

決定セシメント認ズルモノナリ本條ノ場合ニ



ニ止マハ、故ニ本権ノ訴権ハ、常ニ權利ノ基本ヲ

決定セシメント強ムルモノヤリ本條ノ場合ニ

於テハ本権訴権ハ用益権ノ有無ヲ決セシメシ

トシムルモノナリ又占有ノ訴権ハ唯原告が事實

上用益権ヲ占有スルヤ又ハ近時之此權利ヲ占

有セシモノナリヤ即チ該權利ヲ究ム莫ク有ス

ルモノ、如ク行使スルヤ又ハ之ヲ行使セシヤ

ヲ決シ因テ他人ノ加入又ハ妨害ヲ排斥セシト

スルモノナリ而シテ原告ノ占有中ハ三者其

ニ妨害ヲ加フルトキハ即チ占有訴権中保持ノ

訴権ヲ行フ場合トス若シ詐偽又ハ暴行ニ依リ



左取ヲ剝奪シタルトキハ即チ回收ノ訴権ヲ行  
フ心キ場合ナリ此等ノ訴権ハ左有権ノ章ニ於  
テ其一般ノ意ヲ用ニ実ニ事ニ詳説スル心ニ  
百九十九条以下

右ニ場合タルハ左有訴権ノ交態トシテモナ  
ノ訴権アリ即チ新工告発訴権及び急害告発訴  
権是ナリ（参考ニ百〇一条、第ニ百〇二条、第ニ百〇  
三）於四条以下

今特ニ之ヲ示サズトモ用益者此ノ如キ左有  
ノ訴権ヲ有スルハ固ヨリ明カナリ何トナシハ法

左ニ於テ取理ノ左有訴権ト謂ヒ何等ノ區別ヲ



ノ訴権ヲ有スルニ因テリ  
何トナシハ法

之ニ依テ取理ノ  
与有訴権ト謂ヒ何等ノ區別ヲ  
設ケサルヲ以テ凡テノ与有訴権ヲ用益者ニ附  
其ニルモノナルコト勿論ナシハナリ  
用益者ハ其用益権ニ実ニル物上訴権ノ外亦  
地役ニ実ニル訴権ヲ有スルモノナリ此訴権ハ  
令ヲテ二種ト爲スコトヲ以テ其一ハ他ノ土  
地ヲシテ要役地ノ利益ニ爲スル働方ノ地役ヲ  
負擔スルコトヲ破認セシメテ要役地ニ屬ス  
ル地役ヲ継承スルモノナリ之ヲ要請ノ訴権ト  
爲ス其二ハ要役地ガ他ノ土地ノ利益ナシハ



ノ地役ヲ負担スルコトヲ争議拒絶スルモノニ  
テテ立テ拒却ノ訴権ト謂フ

此二個ノ訴権ハ其ノ物権ナルヲ以テ用益者加  
権利ノ基存ニ実ニテ争ヒテ友ニト軍ニ権利ノ  
行使アリ占有ニ実ニテノ争ヒヲ起スト之経  
ヒ本権ノ訴権又ハ占有ノ訴権ト區別スルコト  
ヲ得心シ

此場合ノ占有訴権モ亦保持ノ訴権ナルコト有  
ルベシ或ハ回收ノ訴権ナルコトアル心シ

若シ用益者隣接ノ土地ニ一個ノ地役ヲ行使シ

而シテ其地役ノ占有ヲ妨害セラルルコトアリ



若し用益者隣接ノ土地ニ一箇ノ地役ヲ行使シ

而シテ其地役ノ占有ヲ妨害セラレタルトキハ  
用益者ハ地役ノ保持訴権ヲ行フテ地役ヲ完フ  
スルコトヲ得ベシ之ニ及ビテ若し地役ノ占有  
ヲ奪ハレテ未だ一年ヲ経過セザルトキハ  
占有回收ノ訴権、由テ地役ヲ回收スルキナリ  
占有ヲ奪ハレタルモノガ回收ノ訴権ヲ行フコ  
トヲ得ル時間ヲ定ムル経過セシメタルトキハ  
最早占有ノ訴権ニ由テ之ヲ回收スルコト能ハ  
ズ即チ衝方ノ地役ノ奪権ノ訴権即チ地役ノ回  
復ノ訴権ヲ行フコト必要ナリ



凡テ右三個ノ訴権ハ要清ノ訴権ナリトス何ト  
ナレハ甲益者ハ之ヲ以テ自己ノ權利ヲ確認セ  
ルニシテ元ノナレハナリ

右ノ場合ニ及ビ隣地ノ所有者ヨリ要役地ノ上  
ニ地役ヲ有スル旨ヲ主造スルハキハ用益者が  
隣人ニ對シテ權利ノ有無ヲ裁決セシメトス  
ル場合ニ於テハ甲益者ノ拒却訴権ハ本権ノ訴  
権ナルベク荒シ然ラズシテ惟ク右ノ事實ノミ  
ヲ裁決セシメトス欲スル場合ニ於テハ其拒却  
ノ訴権ハ單ニ右ノ訴権ナルベシ而シテ右ノ有

ノ拒却訴権ノ場合ニ於テ若シ隣人が要役地ノ



ノ訴権ハ専ラ占有ノ訴権タルベシ而シテ占有

ノ拒却訴権ノ場合ニ於テ若シ隣人が要後地ノ  
上ニ行使ヲ起シ以テ僅カニ其土地ヲ妨害スル  
ニ過ギサルニ於テハ用益者ノ訴権ハ保持ノ訴  
権タルベシト多ク若シ隣人ノ主張スル地役ヲ  
已ニ全ク占有シ而シテ未ダ一年ニ滿タサルコ  
於テハ用益者ノ權利ハ占有回收ノ訴権タルベ  
キナリ

又後ニ記載シタル凡テノ訴権ハホ三者ヨリ用  
益者ニ對シテ行フコトアルベシ此場合ニ於テ  
ハ用益者ハ被差ノ地位ニ立ツモノナリ第三者



ハ用益者ニ對シ或ハ權利ノ基本ニ於テ或ハ  
有ノ事實ニ<sup>（説）</sup>因テ用益権ヲ要求シ又ハ地役権ヲ  
非認シテ要請訴権又ハ拒却ノ訴権ヲ握ル  
コト有ル心シ此ノ如キ場合ニ於テモ其訴権ノ  
目的名稱及び性質ニ於テハ左ノ異ナルコトナ  
ク惟當事者ノ地位前ニ掲ケタル所ト異ナリ又  
ルノミ法律ニ於テ此事ヲ記サズモノハ本第  
ノ目的トスル所軍ニ用益者ノ權利ヲ規定スル  
ニ在シハナリ故ニ用益者ノ義務ノ履行ヲ因  
ルニ方ツテ備ホ之ヲ設クル權有アル心シ

第三頁ニ於テ據ニ主事スルキモノアリ即チ要



ルニ方ツテ保ホ之ヲ認リル様會アルベシ

并三項ニ放テ特ニ注意スルキモノアリ即チ要

役地ニ笑ユル働方又ハ受方ノ地役ニ付テ争訟

起ルトキハ用益者ハ固ヨリ原告又ハ被告トナ

リテ訴訟ヲ為ス權利ヲ有スレドモ仍チ虚有者

ヲシテ其訴訟ニ参加セシムルヲ以テ最モ利ア

リト為ス何トナレバ虚有者ハ用益者ニ比スレ

バ最モ優ク此訴訟ニ放テ保護ヲ有スコトヲ得

心ケレバナリ

并六於ハ条

用益者ノ權利ハ元来終身ノモノニシテ且ツ人



ノ著眼ヲ主トシテ期限ヲ定メ又リト多クモ其權  
利ヲ他人ニ讓渡スコトノ點ニ於テハ決シテ用  
益者ノ一身ヨリ分離スルコト能ハザルモノニ  
汎ラカレナリ夫レ然リ用益者既ニ其權利ノ在  
部ヲ讓渡スコトヲ得人モノトスル以上ハ全部  
ノ讓渡ニ比シテ更ニ十ナル要否ノ要否ヲ爲シ  
得ルコト固ヨリ諦ヲ俟タズ例之ハ賃借權又ハ  
抵当權ヲ設定スルガ如キ即チ是ナリ  
惟抵当ハ不却產上ニ汎ラカレシム之ヲ設定スル  
コトヲ得ず人モノナリ以テ用益權ヲ抵当ニ

附スルコトヲ得ルニ其用益權が目的物ニ因



付スルコトヲ得ルニハ其用益権が目的物ニ因  
テ不勤産ナルコトヲ必要ト考ス

用益権ノ目的トスル物権が使用ニ因リ多少連

カニ毀損スヘキモノナル時ハ用益者ガ其権利

ヲ讓渡又ハ之ヲ貸貸スルコトハ其為シ得ベク

ラカハ所ト信スルモノ有ラズ然レドモ法律ハ

全ク之ヲ禁止スルコトナクハ惟其制限ヲ設

ケタルノミ(美着第14条)加之ナラズ不慮有者

ハ用益権ノ当初ニ於テ用益者ヨリ保證其他ノ

担保ヲ提供セシムルヲ以テ經令讓受人又ハ賃



借入：於テ収益ノ濫用ヲ爲スノ虞ハナキニ非  
ラズトスルモ充分ノ担保アルモノト得ハザル  
可ナラズ

然レドモ用益者ハ其任意ニテ用益權ヲ永久ニ  
継続セシムルコトヲ得心カラザルハ当然ナリ  
故ニ法律ハ特ニ用益者カ設定ニ付ル權利ハ其  
期限其他ノ点ニ異ニテ用益者自己ノ用益權ト  
同一ノ制限及ビ條件ニ從フハ旨ヲ明定セリ  
惟管珥、寄考ノ性質ヲ有スル借貸借ノ場合ヲ例  
外ト爲スノミ